

言語と経営

Language and Management

吉村 泰志
Taiji Yoshimura**Abstract**

Main purpose of this paper is applying monism of Language-game to Transformational Model of Social Activity and constructing new management theory. Firstly, I review monism of Language-game and define language. Secondly, I review Transformational Model of Social Activity on Critical Realism and Bhaskar's thought for language. Thirdly, I apply monism of Language-game to Transformational Model of Social Activity. Fourthly, I try to construct the management theory based on the view of unenlightened person. Finally, I propose study of management folklore based on the above consideration.

Keywords: Language, Critical Realism, Buddhism, Yamato-Kotoba, Management Folklore

【目次】

- I はじめに
- II 言語ゲーム一元論と言語の定義
 - II-1 言語ゲーム一元論
 - II-2 言語の定義
- III 批判的实在論と言語
 - III-1 TMSA と実在的世界の三領域
 - III-2 バスカーの言語観
- IV TMSAの言語ゲーム一元論的解釈
 - IV-1 言語ゲーム一元論的解釈
 - IV-2 社会構造の関係論的性格の由来
 - IV-3 社会科学の研究活動
- V 凡夫の経営学
 - V-1 言語変革の経営
 - V-2 「みずから」と「おのずから」の「あわい」
 - V-3 凡夫の経営学
- VI おわりに代えて－経営学的フォークロアの探求－

I はじめに

本稿の目的は、黒崎(1997)がウィットゲンシュタイン(Wittgenstein, L.)の言語ゲーム論にもとづき提示した「言語ゲーム一元論」の立場にたち、バスカー(Bhaskar, R.)の批判的实在論(Critical Realism: CR)、とりわけ社会活動の転態モデル(Transformational Model of Social Activity: TMSA)を独自に解釈しなおすことにある。

そのため、本稿はかなり大胆かつ極端な論理展開をこころみる。私の力量から考えると無謀な試みであり、おそらく誤りをおかす危険性は大きいと考える。しかしながら、その一方で、ときにはこのような知的冒険によって示唆できることがあるだろう。

つづくII章では、まず言語ゲーム一元論の解説と言語の定義をおこなう。III章では批判的实在論を解説し、批判的实在論が言語をどのようにとり扱ってきたのかを考える。そして、IV章で以上の予備的作業をふまえて、社会活動の転態モデルの独自解釈にとりかかる。さらにV章では、独自解釈によってえられた知見を経営現象に応用し独自の経営観を提示する。そして、その経営観にもとづき独自の経営学のありかたを展望する。また最後におわりに代えて、その経営学の独自の研究方法について概観する。

このようにオリジナリティづくしの本稿ではあるが、先述のように読者になんらかの含意なりがあれば望外である。

なお、以下とくに断りのないかぎり、文中では批判的实在論をCRと、社会活動の転態モデルをTMSAと簡略表記する。

II 言語ゲーム一言論と言語の定義

II-1 言語ゲーム一元論

さきほど、黒崎(1997)の言語ゲーム一元論

の立場に依拠するとのべたが、正しくは「アイディアを借りる」という表現が適当だろう。つまり、言語ゲーム一元論ないしウィットゲンシュタインの言語ゲーム論と批判的实在論を精緻につきあわせたりすることが本稿の目的ではない。あくまでその発想や観点に可能性を感じ、文字どおり借用したいのである。

では、その言語ゲーム一元論とはなにか。それは「〈言語ゲームの世界〉こそ、我々にとって唯一の〈所与〉であり、全ては、そこにおいて考えられねばならない」という思想である」(黒崎, 1997, p.43)

つまり言語は存在に先立ち、「〈言語ゲームの世界〉こそ、存在の棲家なのである。そこから離れたものは、全て、その存在を失い、幻想になってしまう」(傍点原文ママ)(黒崎, 1997, p.56)のである。

事物はもとより、痛みのような人間の個人的感覚であろうと(そのふるまいを根拠として)、すべて言語的存在であり、言葉がなければ存在できない。わたしたちがもし言語を失えば、すべては消え失せ、そこには混沌、否、混沌とすらいえないものが残る、否残るとすらいえない、と黒崎(1997)は指摘する¹⁾。

「今日寝坊した」という事実ないし出来事や「黒板」という物体が言語を前提にして存在するというのは理解しやすいが、「痛い」という個人的感覚が、言語がなければ存在しないとはどういうことだろうか。感覚は身体にそなわった機能であり、言語がなくても現に感じるし、あきらかに存在しているといいたくなる。私は黒崎(1997)の議論をつぎのように解した。

すなわち、この世界に痛みに関する言語ないし言語ルールがあり、それを人々が共有しているから、わたしたちは痛がることのできるのである。

1) 具体的には、黒崎(1997) p.17を参照されたい。

痛いときに「痛い！」という表現できる言葉があること、そして、たとえば「痛い！とさけぶ」や「痛いところに手を当てる」などの「痛いという動作はこうである」というふるまいを記述する言葉があるからこそ、わたしたちは人前でもあるいは一人でも、ある意味安心して痛がることのできるのである。そして、他人もその痛みの言葉を聞きふるまいを見て、(実際はともかく)「彼・彼女は痛いのだ」と言うことができるのである。痛みの言語ルールがあること、そして実際の痛みのふるまいによって、痛みはその存在を確保するのである。

たとえば、痛みの言語とふるまいを学ぶまへの乳幼児や、それらが未発達な社会の人々は、自分の体に去来するなにか(痛み)がわからないだろう。感じないのではない。感じるものなにかわからないのである。その際のふるまいも本人も他人もまったくわけがわからないだろう。言語がなければ、痛みはその存在を失うのである。痛みはわがものではない。

ただし、乳幼児のケースは若干異なる。乳児は言語ルールの外にあるが、親(あるいはまわりの大人)は言語ルールの内におり、そのルールにもとづいて子の様子を痛みと推測するかもしれない。しかし、子が痛みの言語を学び、そのルールにそって痛みのふるまいをしてくれないかぎり、親は推測を重ねるだけで、断定に達することはできない。したがって、このケースも痛みが言語と独立して存在できないことを示している。

また、以上は感覚のみならず、悲しみや怒りなどの感情または思考などもふくめて、心的現象一般にも共通していえることだろう。くわしい論理や内容は黒崎(1997)を読んでもらわなければならないが、わたしはこの考えに同意する。

II-2 言語の定義

なお、これまで言語とはなにかを不問にしたまま議論を進めてきたが、以上の考察にもとづきつ

つ、簡単ではあるが本稿における言語の定義ないし内容を示しておきたい。

一般に言語とは「音声や文字によって、人の意志・思想・感情などを表現・伝達する、あるいは受け入れ・理解するための約束・規則。また、そのために用いられる記号の体系」²⁾と定義される。そして、音声を介するものを「話し言葉」、文字を介するものを「書き言葉」とされる³⁾。本稿でも、とりあえず汎用性の高さから上記の一般的定義を採用しておく。

まれに、上記定義に「また、それ(規則や記号)を用いて思考・表現・伝達を行う行為」(括弧内筆者)⁴⁾もふくめられる場合もあるが、しかしわたしはこの行為を「言語を利用した活動」すなわち「言語活動」ととらえ、言語とはわけて考えておきたい。

より具体的にのべると、本稿における言語とは単語や語句やそれら言葉のつらなり、名称や概念(定義)、そして記述された文字や文・文章などを指し、それらを使用した活動、つまり発話や書くといった行為は、単独・複数にかぎらずすべて言語活動である。のみならず話し言葉や書き言葉をもちいない単独ないし複数での身体的活動(ふるまいやシンボリックな行動や作業)もふくまれる。のちにふれるが、なぜならこれらの活動は言語ゲームの枠のなかでやりとりされる所作(一定の言語様式をもった)にすぎず、結局のところ言語に翻訳できる。また、上の節での検討から思考・感覚・感情なども言語的存在であり、それらの心の動き、つまり心的活動(黒崎, 1997)も言語活動であるといえる。痛覚の例でいうと、痛みは言語であるが、痛みのふるまいは言語活動である。

すなわち、言語ゲームの世界を唯一の所与とみ

2) 松村 明監修(1998)『大辞泉(増補・新装版)』小学館や、北原保雄編(2010)『明鏡国語辞典(第二版)』大修館書店などに依拠。

3) 松村 明監修(1998)『大辞泉(増補・新装版)』小学館に依拠。

4) 北原保雄編(2010)『明鏡国語辞典(第二版)』大修館書店に依拠。

なす本稿では、人間がおこなう活動すべてがなんらかの言語のゲームやルールにのっとっており、それ自体が言語活動であると考え。そして、あらゆる活動やふるまいは言語に置きかえられ、翻訳されると考えられる。

しかし、経営学の領域では「暗黙知（あくまで経営学における）」あるいは「非言語コミュニケーション」といった概念が重視される。これらは以上の考えとどのように位置づけられるのか。わたしは、あらゆる知識とコミュニケーションは言語を前提にしていると考え。

たとえば、暗黙知といいつつ、「言葉や文章で表すことが難しい経験的知識」⁵⁾と言葉であらわされる。存在（を規定）させるには言語を頼らざるをえない。また、そもそもほんとうに暗黙ならば、「暗黙」知という名前すらつけられないだろう。定義や名称だけではない。暗黙知の具体的内容（経験や勘）についても、言語と独立して存在できない。たとえば、作業員がある特定の身体知について納得する場合を想定しても、その作業員が「こういう感じ」とか「このような感覚」などと言語で思考し、メタファーをもちいていいあらわそうとする。うまく表現できないだけで、言語表現のたくみな人であれば、あるいは的確に言語化できるかもしれない。暗黙知（経営学における）は言語表現の困難さのレベルの話であって、それを「言語ではない」あるいは「言語がない」といった話と同義にしないほうが生産的と思われる。

つづいて、シンボリックな行動にもとづく非言語コミュニケーションを検討しよう。たとえば、「会議の席でうなづく」というシンボリックなふるまいは、非言語なコミュニケーションと考えられがちである。しかし、その動作は「了解した」や「賛意を示す」という言語に置きかえることができる。つまり、うなづくとは「こういう場面で

うなづくということは了解を示している」という言語的約束事があるから成立するコミュニケーションなのであり、決して非言語なコミュニケーションではない。

うなづくは一定の言語様式をもった所作、すなわち言語活動なのである。言語がなければ不気味千万な動作だろう。非言語だといわれているコミュニケーションのおおくに上記とおなじ指摘ができるのではないだろうか。

III 批判的实在論と言語

III-1 TMSAと実在的世界の三領域

では、いったんここでバスカーの批判的实在論、とくにTMSAに目を転じてみよう。まず、その内容を簡単に素描しておく⁶⁾。

TMSAとは、一方を他方に還元することも、一方を他方で説明したり再構成したりすることもなく、社会と人間の相互作用関係を記述するモデルである。

まず、社会はさまざまな社会構造からなる一つのアンサブルないし複雑な全体としてとらえられる。そして、その社会構造とはさまざまな事物の集合、より正確にいえば、それら事物をむすびつける関係性の総体である。したがって、社会もまた全体論的關係性そのものであるといえる。

TMSAにおいて社会構造（ないし社会）は人間主体に先行して存在する所与の条件である。人間主体はこれら所与の社会構造に条件づけられながらも、質料因として利用し意識的に社会活動をおこなう。

他方、社会構造はこの人間主体の活動を通じて、創発的に再生産ないし変形され、結果としてつぎの活動の先行与件となる。そして、その社会

6) なお、いちいち言及しないが、以下の批判的实在論の素描については、Bhaskar (1975)、Bhaskar (1979)、Lawson (1997)、Danermark et al. (2002)、坂本 (2007)、水谷 (2015)、水谷 (2016) などに多くを負っている。

5) 野中 (1990) pp. 53-57 参照。

活動がつづくかぎり相対的に自律しつつ存続する。人間はみずからの社会活動のために社会構造が必要であり、社会構造はみずからの再生産（存続）のために人間（活動）を必要とする。

ただし、まずこの再生産過程は創造過程ではないことに注意を要する。つまり、社会はつねに人間に先行しているので、所与のものに変更をくわえることはできても、創造することはできないという（Bhaskar, 1979）。この主張は道理だろう。

また、この再生産過程は人間が無意識のうちにおこなっていることにも注意を要する。つまり、人間は社会構造にのっとして意図的・意識的に活動をし、そのなかで社会構造を経験的に現認することもできるが⁷⁾、しかし、その活動が同時に当の構造を再生産していることには気づいていないのである。

上述のTMSAは、バスカーが批判的实在論以前の超越論的实在論（Transcendental Realism：TR）で提示した「实在的世界の三領域」にもとづいている。实在的世界の三領域とは、主として自然科学を基礎づける科学哲学ないし科学方法論であり、TMSAは基本的にこの考えを社会現象に応用したものである。したがって、TMSAをその三領域に即して記述しておこう。

まず、社会構造は複数の事物から構成されるが、この事物の特有な関係のあり方が、その社会構造をして他の構造と異なる特徴をあたえ、さらに特定の社会現象を生みだすメカニズムを保持している。この構造やメカニズムが存在する層を实在の領域とよび、三領域のもっとも深層に位置する。

さて、TMSAにおいて人間は社会構造にのっとして活動をおこなうが、これは言いかえれば、人間の社会活動を通じて、社会構造に内在されているメカニズムが作動し因果的な力が発揮され、

社会現象を引き起こしているといえる。この層を事象の領域とよび、实在の領域の表層、つまり三領域の中層にあたる。

ただし、ある社会構造の因果効力はつねに特定の社会現象として明確にあらわれるわけではない。開放系である社会には多様な構造が存在し、それらも人間活動を通じてそなわっている因果力を発揮している。そのなかには、ある社会構造の作用を増幅するものもあれば、反対に弱めるものもあるだろう（むろん無関係のものも）。この意味で社会現象とは、無数の社会構造の因果力が合成した複合状況なのである。

さらに、ある構造やメカニズムがあっても明確な効果や事象がおきないことは、最深層の实在領域と中層の事象領域が同期していないことを意味する。そのうえ、このことは社会構造のもつ因果力があくまで傾向として把握されなければならないことを示す。ここでいう傾向とは「事物に備わった力ないし潜勢」（Bhaskar, 1975邦訳, p.3）のことであり、しかしその作用が「必ずしも特定のはっきりした効果を伴ってあらわれるわけではないこと」（Bhaskar, 1975邦訳, p.3）である。

最後に、こうして生起した社会現象をわたしたちは認識し解釈することになる。この層を経験の領域とよび、三領域のもっとも表層に位置する。ただし、おなじ社会現象であっても、その認識や解釈は人それぞれさまざまであり、またそもそも認識しない主体もいる。したがって、事象領域と経験の領域も同期していない。

以上が、实在世界の三領域に即したTMSAの解釈である。

Ⅲ-2 バスカーの言語観

以上で独自解釈のための予備的作業は終わったが、最後にバスカー自身が言語をどのように考えているのかについてふれておく必要があるだろう。

7) バスカーによると、社会構造はそれ自身が左右している人間活動を媒介にはじめて成りたつので、社会活動を離れてそれを経験的に現認することはできないという。Bhaskar (1979) 邦訳 pp. 42-43 参照。

さほど大きくとり上げて論じていないことから、言語をあまり重視していないことがうかがえるが、数少ない言及箇所でのつぎのように記している。

「言語は人々に先だって存在していなければならず、その意味で人々は当の言語を創造するわけではない。反面、言語は人々がそれを使うことをつうじてのみ、現実の言語として、すなわち「生きた」言語として存在し、その中身を変えていくことができる。したがって、社会を言語というモデルであらわそうとすれば、社会は人間によってつくりかえられるべき構造としてつねにそこにありながら、他方ではその「担い手」である人間を欠いては存立しえない構造として存在する。」(Bhaskar, 1975邦訳, p.250)

以上のことから、すくなくともバスカーは言語を社会構造としてとらえていると考えられる。ただし、それはあくまで社会というアンサンブルを構成する構造の一種であって、すべての社会構造が言語形態をとるとは考えていないといえる。

さらに、おそらくバスカーは言語が存在に先立ったり、存在の条件であったりすることには否定的であったように思われる。

「あらゆる行為は言語行為、もしくはその類似物(意味する行為や伝達のための行為)であるとか、それらの行為に基づいてモデル化されるとか、それらの行為と同じやり方で説明できるとか、それらの行為と対応する関係にあるとかいった議論はすべて誤りである。実在するものと知りうるものや語りうるものとの間に一致や相同はないし、言語の限界が世界の限界を画することもない。」(Bhaskar, 1979邦訳, p.164)

社会や社会構造と言語の関係を直接的に論じたものではないが、言語ゲーム論や言語ゲーム一元

論が示唆する世界観を否定する見解だろう。

さらに、バスカーは「世界に関する言明はすべてその世界を記述するのに使われる言語に関する言明に翻訳することができる」(Bhaskar, 1979邦訳, p.188)とする見方を「言語論的誤謬」とよび、つぎのようにつづける。

「また、この錯認の影響はさらに広く社会科学の実体分野に及んでいる。次のような見解はその典型例と言える。「例えば『自殺』というカテゴリーが作られないうちは、「自殺」というものが言葉の正しい意味で存在している(存在しているとは「事物」としてあるということである)とは言えない。…中略…したがって一般に、『自殺』はある時点において、存在しているとも存在していないとも言えるのである。」(Bhaskar, 1979邦訳, pp.188-189)

これはダグラス(Douglas, J.)の自殺(カテゴリー)に関する著書をバスカーが引用している議論だが⁸⁾、自殺というカテゴリーがなければ自殺という現象は(基本的に)ないというダグラスに対して、自殺という語句やカテゴリーが登場する以前にも、自殺という社会現象や行為は存在していたとバスカーが反論していると解釈できないだろうか。

つまり、自殺というカテゴリーがなくても、自殺という社会活動、そしてその自殺という活動の前提となる社会構造は存在し、人々の自殺によって自殺という社会構造とそれを構成するさまざまな事物は再生産されていた、とバスカーは考えているように思われる。

これに対して、語句やカテゴリーがなくとも現象があったと考えるのは誤りではないか、という

8) バスカーのダグラスへのくわしい言及、ならびにダグラスの著書に関しては、Bhaskar (1979) 邦訳 p.189 を参照されたい。

のがわたしの考えである。

のちの議論を先取りするが、自殺という明確な語句やカテゴリーはなかったが、みずから死にいたらしめることを表現する語句やふるまいはあったのではないか。また、みずから死にいたらしめる際に利用できる事物の名称もあつただろう（その事物の本来の名称ないし機能・目的とは違う利用のされ方という創発的ケースもふくめて）。かならずしも自殺現象だけあって自殺にかかわる言語がなかったとはいえないだろう。

IV TMSAの言語ゲーム一元論的解釈

IV-1 言語ゲーム一元論的解釈

質料因としての所与の社会構造はどのような形態でわたしたちの前にあらわれるのだろうか。私は言語として立ちあらわれる以外にない、と考える。

バスカーは、「社会が再生産されたり変形されたりするためには、当の社会的文脈に適った技術や能力や習慣が欠かせない」(Bhaskar, 1979邦訳, p.41) という。そして「そうした社会的要素のストックが習得され維持されていく諸々の過程を総称して、社会化と呼ぼう」(Bhaskar, 1979邦訳, p.41) とのべている。

この学習主体は当然人間である。そして人間がそうした社会的な技能や習慣をいかに学ぶかという、それは言語を通じてはかはないだろう。質料因としての社会構造は言語として存在し、その言語を学ぶことでわたしたちは社会化する。そして、その学んだ言語を駆使する活動、すなわち言語活動が、社会構造を加工する人間の社会活動だといえないだろうか。

では、言語ゲーム一元論的発想でTMSA（および実在の三領域）を具体的に解釈してみよう。

社会構造と社会構造を構成する事物は言語としてわたしたちの前にある。そして、そのようなある特定の言語の集合体（複合体）ないし関係性は、ある

特定の社会現象を引き起こす因果的な力をそのメカニズムとして内在していると考えられる。

ただし、そうした言語の体系自体が自動的に因果力を発揮できるわけではない、それはあくまで潜在的な力として保持されており、これらの潜在的な因果効力（メカニズム）が具体的に発揮されるには、人間の言語活動という媒介が必要となる。人間が言語活動をおこなうことによって具体的な社会現象が引き起こされる。これは、いわば言語の集合体が具体的な因果効力を事象領域において発揮しているといえるだろう。ただし、その因果効力を助長ないし相殺、さらには減衰させる他の言語の集合体（関係性）もまた存在しており、かならずしもその因果効力は事象領域において明確に生じるわけではない。つまり複合状況なのである。

言語の集合体ないし関係性が存在しても、その因果効力は複合状況ゆえに明確に生じない。つまり実在の領域と事象の領域は同期していない。そして、言語活動の結果実際に生じた社会現象を目の当たりにしても、その認識は人によってさまざまであり、事象の領域と経験の領域もまた同期していない。

先述したように、人間の社会活動には社会構造の再生産（変形）という側面があり、人間活動を媒介にしてはじめて社会構造は存立できる。すなわち、ある言語の関係の総体は、人間の言語活動を通じて当初の言語の関係性や位置づけが変わったり、新しい言語が追加されたり、一部が入れかわったり、あるいはこれまでの関係性を包括する言語が開発されたりして変形されつつも、人間がそれらの言語をつかうかぎり存続する。

以上を起業という社会活動にたとえてみよう。起業という言語はさまざまな一群の語句や言葉から成りたつ。思いつくままに列挙してみると、製品・サービス、個人事業主、会社（選択すべき会社形態）、開業資金、店舗、オフィス、投資家、

補助金、金融機関、経営者、社員、会社法、申請書類、仕入先などなどがあるだろう。むろんまだまだあげられるだろうし、また上述の語がさらに細かい語へと分派もするだろう。さらにたんに事物の名称だけでなく、「起業とは～というものだ」とか「起業が成功するには～が必要だ」などの言明や仮説によっても構成されているだろう。

これらの語句のまとめ（関係のあり方）には「会社設立」という因果メカニズムが潜在しており、ある起業をこころざす人物がこれらの語句を学び活用する言語活動をおこなったとき、実際に「会社が設立される」という社会現象が引き起こされる。ただし、むろん当該人物の起業に反作用する言語／社会構造および言語／社会活動もあり、結果起業ができなかった、あるいは意図したとおりの会社を設立できなかったということもある。そして、そのような会社設立をみて、本人やまわりの人々（家族・知人・縁者）、そして利害関係者や肝心の顧客（市場）がいかに認識するかは、それぞれの主体によって異なる。

バスカーによると、「社会構造は社会活動を介してのみ成立するから、社会活動の当事者がその活動に対して抱く観念や理論と無関係なところで社会構造が存立することはありえない」（Bhaskar, 1979邦訳, p.43）という。起業活動のなかで、起業家はさまざまなことを学び、そのみずからの観念や理論をいろいろな言語媒体を通じて発するだろう。

そして、その言葉はまわりの人々や利害関係者の応答をよぶ。応答はさらなる応答をよび言語活動は広まっていく。そのうえ、このような言語活動の広まりはその規模の違いはあっても起業家の数だけおこる。無論それら起業家同士の間でもおこるだろう。このような言葉の共振・共鳴の結果、既存の起業にかかわる言語の複合体ないし関係の総体は、特定の語句の関係性が変わったり、新しい造語がくわったりして加工される。そし

て、その変形された言語体系はつぎの起業家が利用する質料因となる。

究極的には、こうした起業活動は「起業」という語句がその関係性の一部をなすであろう「資本主義経済」というより大きな言語／社会構造の再生産に資すると考えられる。

以上がTMSAの言語ゲーム一元論的解釈である。

IV-2 社会構造の関係論的性格の由来

社会構造を言語体系として考えることのメリットに、なぜそもそも社会や社会構造が関係性からなり、複雑な因果を織りなす全体論的性格をもつのか説明できる。

よく知られているように、ソシュール（Saussure, F de）は言語とは関係的存在であり、関係の世界において個は存在せず、意味をもつのは差異だけであると考えた（丸山, 2012）。そして、差異とは「～ではない」という否定的要素によってしか定義できず、「～である」という実定的要素によっては規定できないという（丸山, 2012）。つまり、右手は右手ではないもの、すなわち左手と対置されてはじめて存在をえる。そして逆もまた然りである。

同様な考えは仏教のアポーハ説にもみられる。つまり、「牛」なる語は、牛を積極的に表示するというよりも、非牛、すなわち馬などのすべてを除外することを旨とするもの（加藤, 2002, p.142）のであるという。むろん、他方で牛は非牛から排除される。このように語は相互に排他的であり、たがいの差異によって己の存在を確保する。そして、語がこのような特性をもつ以上、その背景に関係の網状組織を必然的に含意するという（加藤, 2002）。

黒崎（2009）は、言語の差異や排他的関係を縁起の関係としてとらえる。井筒（1992）によると、縁起とは自己だけで存在しえないものが、他の一切のものを「縁」として依りかかりなが

ら、存在世界におこってくるのだという⁹⁾。黒崎(2009)はこの井筒(1992)の言明に賛意を示し、そして、こうした縁起観をふまえた上だと思われるが、右手は左手に縁って「右手」なのであり、左手は右手に縁って「左手」なのだと思われ、言語の差異が縁起であると説く¹⁰⁾。

仏教において一般に縁起とは因果のことを意味する(増谷・梅原, 1996; 梶山・上山, 1997)。すなわち、他に縁りておこるのである(増谷・梅原, 1996, p. 115)。上述の議論は実質上、言語の差異関係には因果関係が内在していることを示す。右手を因として左手(果)があり、左手を因として右手(果)があるのである。

以上までの議論は、差異の関係をいささか二項対立的なものにとどまる印象をあたえるかもしれない。上記の理論や論者は、決して言語を二項のみの差異としてとらえているわけではないが、わたしはより押しひろげて考えてみたい。

わたしは非牛には右手や左手もふくまれると考える。非牛は単に牛でない動物にとどまらない。非牛であるならば、馬であろうが右手であろうが同じである。差異の関係は一見無関係なものにまでおよぶと考えられる。

仏教では月とスッポンというようなもの間にまで因果関係を認める。「月の存在にスッポンはなんら積極的な役割を果たしていないが、少なくとも月の存在を妨げる作用はしていないという点で、スッポンも月に対して原因として働く」(梶山・上山, 1997, p. 83)のであり、「このような無関係ないし無関心な共存の関係も因果である」(梶山・上山, 1997, p. 83)という。

この因果関係を能作因一増上果といい(梶山・上山, 1997)、とくに能作因とは「あるものが生ずるとき、そのさまたげとならないもの」であるという。たとえば「一つの結果が生起するとき、他のす

べてのものがさまたげをなさないという点で、他のすべてのものが生ぜらるべき結果に対して原因となっているという」(原文ママ)ことである¹¹⁾。

牛という語句と非牛である数多の語句は、直接的、間接的、あるいは無関係な因果関係でむすびついている。当然、このような関係性は牛-非牛だけにとどまらない。また、非右手に牛がふくまれるように因果の流れが逆転もする。極論すれば、あらゆる語句は相互になんらかの因果の糸でむすばれているのである。

皮肉にも他者否定で成りたつ言語は、みずからの位置や存在を確定するために、どこまでもその対照物(他者)を追い求め、因果の縁をひろげ織りなすのである。

ただし、このように表現すると平面的な因果関係の展開をイメージするかもしれない。しかし、わたしの考える言語の関係性は重層的なものでもある。つまり、ある言語がその下にある言語群を包摂するような上位-下位の関係である。ただし、この関係も固定的ではなく、またある面では下位の言語が上位の言語を包摂する場合もあると考える。

たとえば、起業は資本主義を構成する言語だと先述したが、それはあくまで資本主義という社会構造からみた場合である。起業という社会構造からみた場合、資本主義は起業を構成する言語の一つとなる。なぜなら、起業家はまずもって自国の経済が資本主義だからこそ起業活動ができるのであり、資本主義は起業家が活用する重要な質料因の一つなのである。起業は資本主義の下位構造・下位言語であると同時に、資本主義の上位構造・上位言語なのである。

このように言語の世界とは、無限に関係性がつらなる重々無尽の世界、そして、その関係性を

9) 井筒(1992) p. 156 参照。

10) 以上は、黒崎(2009) pp. 22-23, 32-34を参照のこと。

11) 以上の能作因の定義と例については、中村 元(2001)『広説仏教語大辞典 下巻』東京書籍株式会社, p. 1339の「能作因」の項目に依拠している。

通じて相互依存的連係生起 (the dependent co-arising of phenomena) (Macy, 1991) が起こる再帰的・円環的な世界なのである¹²⁾。それは同時に、言語の本質とは個が本体をもたない空であることを示している。

ここで最初の疑問にもどらう。なぜ、社会構造が関係性から成りたち全体論的因果律ないし関係論的因果律を有するのか。その答えは、言語こそがそうした因果律を保持するからであり、言語こそが社会構造だからである。

IV-3 社会科学の研究活動

この節をむすぶにあたって、以上の議論にもとづいて、最後に社会科学の研究活動について検討したい。

先述のように、バスカーは「社会構造は社会活動を介してのみ成立するから、社会活動の当事者がその活動に対して抱く観念や理論と無関係なところで社会構造が存立することはありえない」(Bhaskar, 1979邦訳, p.43) とのべた。これは、社会学者の研究活動も起業家の起業活動となんら変わりがないことを示している。

社会科学の研究もまた社会活動である。社会学者は研究対象とする社会構造にたいして客観的な立場に身をおくことはできない。社会学者が構築する理論は当該社会構造に影響する。誤解を恐れずにいえば、研究活動を通じて積極的に当該構造を再生産しているのである。

社会科学は未知の社会構造をあきらかにするというよりは、既存の社会構造を変形しているといえる¹³⁾。社会学者の提示する概念や仮説やデータは、既存の言語の関係性を統合したり、新しい

むすびつきを生みだしたりして、そのありかたを変えるだろう。

先述の自殺カテゴリーの議論をひきあいになさう。自殺という言語が開発される以前でも、みずからを死にいたらしめることを表現する語句やふるまい、またはその際に利用できる事物の名称があった。ある社会学者がこのような社会現象を観察・分析して自殺という概念を考案したとする。みずからを死にいたらしめるという一群の言語の集合体をくくる、あるいは定義する「自殺」という言語ができたことで、言語間のむすびつきはより強固となるだろう。結果、質料因としての現認もたやすくなり、自殺という言語活動(自殺行為や、自殺について思考したり議論したり、あるいは研究したりという行為)が明確化し、それがさらに強力に自殺言語/社会構造の再生産をうながすようになると考えられる。

研究者にとって社会構造はみずからの研究活動に必要な質料因であり、社会構造にとって研究者と研究活動はおのずから再生産(存続)するための重要な媒介物である。ただし、社会科学者の多くはみずからの再生産への関与に自覚的ではないだろう。おおくは「主体的に改変」したのを「客観的に発見」したと思いきや、こんでいると思われる。

このような社会学者と社会構造の一種の再帰的關係は批判的実在論者にとって特別奇異な主張ではないだろう。

V 凡夫の経営学

V-1 言語変革の経営

ここでは以上の議論を経営学の分野に応用する。とくに第1節では常識的な適用をおこなう。そして第2節以降ではいささか非常識な適用をこころみる。

以上の議論を常識的に経営学に応用した場合、提示できるのが「言語変革の経営」である。企業

12) 相互依存的連係生起については、吉村(2017)において具体的な訳出と解説の引用元を紹介しているので、参照されたい。

13) 言語化されていない、まったく未知の社会構造があるのか、正直わたしにはわからない。なぜなら、結局われわれは言語をとおしてしか世界を理解できないからである。言語化されていない未知の社会構造については何もうことはできない。まさに無記である。

のような経営組織の活動（経営活動）も社会活動である。そして、わたしは経営活動において経営者や組織成員が活用する質料因（既存の社会構造）とは経営資源であると考えている。そして、その経営資源とはいかなる形態で存在し、われわれの前にあらわれるのか。それは言語として現前するのである。

経営資源といえば、一般にヒト・モノ・カネ・情報といわれる。すでに言語として現前している。さらに内容をみていこう。ヒトとは組織のなかの人々、すなわち人材である。人には名前がある。そして彼ら・彼女らをもつ能力や気質も言語であらわされる。また、彼ら・彼女らに付される職位も経営資源「ヒト」の重要な言語的構成要素である。職位はそれ自体が構造化された言語的差異関係の総体である。それが人に職位の名称とともに権限（因果力）をあたえる。さらに、彼ら・彼女らのもつノウハウや経験も暗黙知の議論で検討したように言語である。

モノももちろん言語的存在である。機械設備にはそれぞれの名称があり、それを構成する各部品にも名称がある。それら機械設備があつまって工場という名の施設が成りたち、全体として複雑な生産システムが構築される。そして、しばしば独特の名称が冠されることもある。たとえば「トヨタ生産システム」などである。例は製造業であるが、サービス業でも同じだろう。

カネも会計・経理の専門用語や数字であらわされる言語的存在である。資本、売上高、各種の損益指標や費用、それらの算出方法、それらが生み出す決算書や報告内容、すべて言語である。

むろん情報も言語的存在である。製造業などが保有する技術は専門用語のかたまりである。そのかたまりは「液晶技術」と一括して言いあらわされたり、あるいはその企業独自にネーミングされたり、さらには特許という形で文章化される。

POSなどの販売データも言語である。数値だ

けでなく、数値からひきだされる「男性客のほうがある商品をよく買う」といった仮説や言明も言語である。また、シンボルや商標、社名といったある種の記号が示すブランドも言語である。

このように経営資源は言語の形で存在している、あるいは言語そのものであり、当該組織固有の重層的・水平的関係性を形成している。そして、こうした言語的資源のまとまりは、ある組織的成果（組織現象）を生み出す因果力を内包している。これが経営能力ないし中核能力とよばれるものの本質ではないだろうか。そして、その構造体が潜在させているメカニズムは、組織の人々がそれを質料因として活用し経営活動をおこなうことによって、具体的な効力を発揮する。この意味で、経営活動とは言語活動なのである。液晶技術をつかって商品化するという事は、実質的に液晶技術について思考し、語り、コミュニケーションすることなのである。

ただし、引きおこされる組織現象は、他組織の言語的資源がもつ効力との競合の結果、明確な組織的成功としてあらわれない可能性がある。なお、言語的資源の競合・複合状況はおなじ組織のなかでもおこるだろう。

そして、組織の人々の経営活動を介して言語的資源は再生産され、既存の関係性のあり方を変えていく。この経営観を「言語変革の経営」とよびたい。なぜ「言語創造」ではないかという、バスターが指摘するように、組織の人々は既存の言語的資源に変更をくわえているだけで、創造しているわけではないからである。言語は経営に先立つ。

V-2 「みずから」と「おのずから」の「あわい」

以上の常識的な応用に対し、この節以降のべることはかなりエキセントリックである。眉根を寄せる読者も多いだろう。

言語ゲーム一元論が示唆することは、言語は存在に先立つ、ということだろう。あるいは言語が

存在を生みだすといえる。わたしもある言語を提示し、ある社会構造を存立させ転態をうながしてみたい。

現在のわが国の経営学は主に米国経営学に依拠し横文字の概念があふれている。あるいは横文字を邦訳した概念や横文字由来の概念があふれている。横文字の経営言語は横文字の経営しか生みださない。その因果効力は強力であり他の経営言語の因果力を排除し、横文字の経営だけが現実世界となる。いまやその関係性はグローバルに広がり、ビジネス界も学界もこの言語的社会構造を強力で再生産している。

わたしは、とくにこの状況を変えたいわけではないが、ただ他の経営言語が織りなす世界もみてみたい。とくにわが国の風土や歴史にもとづいた経営言語の世界をみてみたいと思う。

そこで着目するのが「やまと言葉」である。やまと言葉が描きだす世界、とくに竹内（2011；2012）が提示する「おのずから」と「みずから」が生みだす「あわい」の世界に着目する。

日本語では「おのずから」と「みずからは」は、ともに「自（ずか）ら」とあらわすが、そこには、日本人の感覚として「みずから為した」ことと、「おのずから成った」ことが別事ではないという理解がはたらいているという¹⁴⁾。

「おのずから」とは「自然の力」、「自然の成り行きで」、「たまたま・偶然」という意味をもち、「みずから」のはからいではどうにもならない不可避・不可抗力の働き意味しており、「みずから」とは「自分・私」、「自分自身で」、「自分から進んで」、「意識的に」、「自分の考えや意志や感情や欲望や努力で」という意味合いをもつ¹⁵⁾。

この二つの言葉を別事と考えないところにやまと言葉の特徴、そして日本人の感性があるわけだが、とくにその別事ではない状態を表現す

る言葉に「あわい」があるという。「あわい」とは「向かい合い相異なった二つのもののあいだの空間」を前提に¹⁶⁾、「その「向かい合った二つのもの」が両方から出会うところで重なり交わる、あるいは背き逆らう、そうした相乗・相克のダイナミックな状態や関係を表す言葉」（竹内、2011、p. 177）であるという。

つまり、これらの言葉の存在は、日本人がこの世のなかのさまざまな出来事を、如意の「みずから」と不如意の「おのずから」の両方からのせめぎ合いの「あわい」でおきていると考えていることを示す¹⁷⁾、あるいはすくなくとも考えてきたことを示しているのである。

おなじような事情は「できる」という言葉にもうかがえるという。「出来る」とは、もともと「出で来る（いでくる）」という意味であるという¹⁸⁾。「ものごとが実現するのは「みずから」の主体的な努力や作為のみならず、「おのずから」の働きにおいて、ある結果や成果が成立・出現するのだという受け止め方があったがゆえに、出で来るという言葉が出来るといふ可能の意味のもつようになった」（竹内、2011、p. 27）という。

ただし、ここで注意を要するのが、「あわい」が別事ではないものの、同一を意味しているのではないことである。つまり、「おのずから」と「みずから」は重なりつつ異なり、異なりつつ重なっているのである。「みずから」が「おのずから」でありつつ、かつ、ないというのが「あわい」の問題なのである¹⁹⁾。

これはどういうことなのか。竹内（2011）によると、「おのずから」の側から見たとき、われわれのみずからもその中にある。しかし、「みずから」の側から見たときには「おのずから」はあくまで外

16) 竹内（2011）p. 177 参照。

17) 竹内（2012）p. 184 参照。

18) 竹内（2011）p. 27 参照。

19) 以上については、竹内（2011）p. 32, 167 や竹内（2012）p. 10 を参照されたい。

14) 竹内（2011）p. 27 参照。

15) 竹内（2011）pp. 144-145, 153-159 参照。

なるもの、他なるものとしてある」(竹内, 2011, p. 32) という。たとえば、自然(おのずから)は不可思議な力でわたしたち(みずから)を男女にわけ、おのずからはたらきのうちにわたしたちはいる。ただし、わたしたちにとって男か女かは絶対所与の問題であり、絶対的に他なるものとしてのおのずからはたらきの結果なのである²⁰⁾。

では、われわれは運命に翻弄されるだけか。「あわい」とはたんなる運命論なのか。そうではないと竹内(2011)はいう。ものごとが「みずから」の自発的な力だけでなく、また「おのずから」の強制に任せりにするのでもない、そのあわいにおこることを自覚し、そのあわいに求められるいとなみがあるという²¹⁾。たとえば、男として生まれるのは、いかんともしがたい「おのずから」の作用だが、その「男」であることをどう活かすかは「みずから」次第ということだろう。ただし、そのいとなみは「おのずから」に反発しねじ伏せるといふよりは、いかに受けいれ流すかという融通無碍のイメージが近いだろう²²⁾。

この「おのずから」と「みずから」による「あわい」の世界観をバスキアのTMSAとむすびつけているのが水谷である。水谷(2017)は社会構造(の因果力)を「おのずから」に位置づけ、人間(の活動)を「みずから」に位置づけ、「あわい」をその両者があわさって生じる「転態」現象としてとらえる。そして、この世の出来事が、努力論による「なす」(＝人間活動)と運命論の「なる」(＝社会構造)との間の「ゆらぎ」でしか説明できないと説く²³⁾。

わたしはこの考えに深く賛同する。「おのずから」がバスキアのいう社会構造のみならず自然構

造もふくめている点に注意が必要だが、まさに「おのずから」も社会構造も絶対的な先行与件として人間を規制している。ただし、制約要因でありながら、かつ人間が「みずから」活用する質料因でもあるのだ。

また、「おのずから」は「みずから」をその内にとり込んでいるが、社会構造も人間活動を取り入れて再生産を果たしている。ただし、「おのずから」は「みずからは」のたんなる総合ではなく、還元主義にも陥っていない。

V-3 凡夫の経営学

竹内(2011)はさらに、この「あわい」の思想を親鸞の思想にむすびつける²⁴⁾。

親鸞において「おのずから」とは絶対他力の「阿弥陀如来の本願(第十八の誓願)」である。そして、「みずから」とは「南無阿弥陀仏」と唱える「称名念仏」であるという。わたしたちからみて阿弥陀如来のはたらきは絶対の他のはたらきとしてあるが、逆に阿弥陀如来の側からみれば、われわれはすでにその手の内にあるという²⁵⁾。そして、この本願を信じただけですら念仏を唱えることが「あわい」なのである。

これをわたしはつぎのように解する。阿弥陀如来の本願は、既存の言語/社会構造ないし質料因としてあまねく人々に開かれている。ただし、このままではなんらの因果効力も発揮されない。ある人物が阿弥陀如来の本願に応え、念仏を唱えるという言語/社会活動をおこなって、はじめて阿弥陀如来の「他力」という因果効力が発揮され、

20) 以上は竹内(2011) p. 52 参照。

21) 以上については竹内(2011) p. 162, 178 参照。

22) たとえば竹内(2011)は、「日本人の思想伝統には「おのずから」の働きを、そのまま受け止めるのではなく、それぞれにおかれた「みずから」の「現実に展開して生きる不思議な能動性がある」(竹内, 2011, p. 55) とのべている。

23) 水谷(2017) p. 26 参照。

24) 具体的には竹内(2011) p. 30, 160, 162, 179 などを参照されたい。

25) 竹内(2012) p. 17 参照。

「凡夫」の救いという社会現象が生じる²⁶⁾。そして、ある人物が応答し関係性の先に阿弥陀如来を存立させるかは「縁」であり²⁷⁾、まさに両者の「あらい」なのである。

そして周知のように、この親鸞に上記の教えを伝えたのが師である法然である。法然は厳しい修行により現世でさとりをえようとするそれまでの仏教を自力「聖道門」とし、いかなる凡夫であっても弥陀の本願にすがり念仏を唱えるだけで浄土に往生できるという他力「浄土門」を説いた。阿弥陀如来によって選択（せんちやく）された「易行念仏」の教えである²⁸⁾。

他力による浄土門が「おのずから」と「みずから」の「あらい」の世界観であるなら、自力による聖道門は「みずから」のみの世界観であるといえる。

わたしは横文字の経営学も、それに影響を受けたわが国の経営学も、たとえるなら自力聖道門の経営学であったと考える。マネジメント（管理）、コントロール（支配）、ビジョン（目的）、計画、意図、戦略、意思決定、PDSサイクル、改善、ラーニング、パフォーマンス、競争優位、シェア占有、ニーズ充足、プロモーション、ホスピタリティ、プロジェクト、成長、ポジショニング、リソース、ケイパビリティ、コンピタンス、リーダーシップ、自己実現、内発的動機づ

け、イノベーション、創造、組織変革、所有、ガバナンス、ポジティブ、理念、美德、ナラティブ、プラクティス、内省などなど。主体的に目的を達成し成果をあげるのが経営なのだから、当然「みずから」に重きをなす言語、「自力」を頼む言語で埋め尽くされている。そして、無論ビジネス界もこれらの言葉をつかってきた。

上記の言語的世界では、「おのずから」や「他力」といった概念は非科学的である、主体性を放棄している、あるいは弱さ・怠惰の象徴であるとして嫌悪感すら抱かれるだろう。

しかし、わたしはここで「念仏をとえればビジネスが成功する」などといいたいのではない。そもそも念仏は現世利益のためにおこなうものではない。その発想に学べないかと考える。

ビジネス社会と化した今日だからこそ、みずからのコントロールではどうにもならず、調査や分析のおよばない世界があることもまた認めてよいのではないかと思う。そうした不如意なもの（自然ないし神仏に仮託されたもの）を受け入れるあそびやあきらめがあってよいのではないか。「おのずから」や「他力」という言葉が一隅で生きていてもよいだろう。

竹内（2011；2012）は、現代は「はかる」という言葉が第一義にされる社会だという。「はかる」とは物事を計量・計測することから、計量したものをあれこれ調整・案配・推測すること、そしてそうしたものをまとめ、何かもくろみ企てることであるという²⁹⁾。つまり、「人がある意図や計画を持って生活していく上で必ず求められる基本的な営み」（竹内，2011，p. 12；竹内，2012，p. 185）であり、すぐれて「「みずから」のいとなみをあらわす言葉」（竹内，2012，p. 184）なのであるという。

竹内（2012）によると、そのいとなみが「お

26) 阿弥陀如来の真の因果効力（真の救い）は、輪廻転生を逃れ死後浄土へ生まれることである。ただし、この因果効力の結果は念仏を唱え実際に死んでみないとわからない。しかし、念仏を唱えるという言語／社会实践が、現世においても因果効力を発揮し、救済という社会現象を引き起こした可能性はある。

のちにふれるが、現代人のおおくは輪廻転生や極楽浄土に懐疑的で実感しにくい。仏教的世界観、それも聖道門の世界観が支配した当時、末法の世にあって凡夫は地獄に落ちるしかないと思った衆生にとり、親鸞の師である法然が唱えた易行念仏（浄土門）が、どれだけ現世での救いをもたらしたか想像に難くない。阿弥陀如来の本願が法然（と親鸞）の実践を通じてその因果力を発揮し、実質的な現世救済という社会現象を引き起こしたのである。

27) 「関係は存在に先立つ」（末木，2013，p.24.）のである。

28) 法然その人と教義、および親鸞との関係については、法然が1198年に記したとされる、阿満利鷹釈「解説（2013）」『選択本願念仏集—法然の教え—』第三版のほか、大橋（2011）、阿満（2011）、田村（2008）、佐々木（2014）などを参照した。

29) 竹内（2012）pp. 184-185 参照。

の「はずから」とのほどよい「あわい」を失ったのが近現代の日本であるという。つまり、近代社会では、「ひたすら明瞭に「はかる」こと、効率的に「はかどる」ことが求められてきた」（竹内，2012，p. 186）。科学、技術、経済のみならず、文化や社会まで「はか」第一主義が支配するようになった。そこではなにより「はかがいく」こと、「はかばかしく」結果が求められる。そしてその背景には、近代西洋のプロジェクト、プロデュース、プロモーション、プログレスといった言葉に代表される、前のめり「pro-」の姿勢や前望的（prospective）な時間意識といったものが見いだされるという³⁰。

この「はかる」世相をもっとも体現するもの、あるいはこの言語世界をつくりあげたといっているものこそ、横文字由来の経営学とビジネス界だろう。

この「はかどる」や「はかがいく」の「はか」がないのが「はかない」という言葉である。「はかない」とは、「つとめても結果をたしかに手にいれられない」という意が基本」（竹内，2012，p. 191）であるという。そして、この「はかない」ということを感じるのが、「はかる」ことに心奪われてきたビジネス社会で重要な感受性だという。その「はかない」の感受性とは、みずからの有限性やものごとの一回性へのいとしさ、おもしろさ、あるいはうつくしさを感じる心だという³¹。

それは仏教でいうところの「思うにならぬ」もの・ことに執着する「苦」（中村，2015）に相当し、「すべてのものはうつり変わりゆく」という「無常」に相当する。

「はかない」や「一回性」にうつくしさやおもしろさを感じる「やまと言葉」と、「苦」や「無常」に諦観を見いだす「仏教」との違いは興味深

いが、いずれにしても「やまと言葉」や「仏教」を文化的風土とする日本人には、こういう感受性がかつてはあったということだろう。わたしは、こうした言葉を顧みる経営学があってもよいのではないかと思う。

しかし、「みずから」が「はかる」ことのできないもの、すなわち「おのずから」とは、結局のところ経営学でもよくいわれる「意図せざる結果」にあたるのではないか。わざわざ「やまと言葉」や「仏教思想」を持ちださなくてもよいのではないか、という指摘もあるだろう。だが、わたしは意図せざる結果の概念では一面的であると考ええる。

経営学やビジネス界では意図せざる結果を意図せざる結果のままに放っておくことはできない。たまたま成功した施策や商品開発を、一過性のものとできずに再現し制度化しようとする。学者も予測・再現のための成功法則を構築しようとする。偶然を必然に。意図せざる結果のコントロール（活用）を考えてしまう、考えざるをえないところに経営学の業がある。経営学もビジネス界も、あたりまえの話だが、成功した結果の再現・理論化に執着するのである。

このように「意図せざる結果」は「意図した結果」に昇華されなければならない。それは不確実性の極限縮小をはかる「みずから（自力）」の行為なのである。意図せざる結果という概念は、結局のところ行為主体側から発想されている。そこに「おのずから」との「あわい」はない。

これまでの横文字由来の経営学は「自力」や「みずから」に価値をおく人間観にもとづいていた。つまり、企業も個人も自助努力を惜しまず、優れた成果を目指すものと想定されてきた。

ただし、優れた企業や個人もいつかは衰退する。しかし、いまの経営学にはそうした企業や個人を受けいれる余地はない。企業も個人も回生を夢見て、結果に執着し思いにならぬものごとをコントロール

30) 以上、この段落については竹内（2011）p. 12, 34 や竹内（2012）p. 184, 186 を参照されたい。

31) 以上、この段落については竹内（2011）pp. 12-13 や竹内（2012）p. 191, 192 参照のこと。

しようと懸命に苦闘する以外に道はない。

また、そもそも経営努力ができない・しない企業・個人もある。戦略を立てられない経営者、目的を示せない経営者、意思決定のできない経営者、権限を自己顕示に使う経営者、上に従順で事なかれ主義の従業員、成長欲求がなく安定志向の従業員、ニーズがあるかもわからないような商品を売る従業員、職場で自己実現ではなく自己欲望を満たそうとする従業員、そもそも働く動機のない従業員、ガバナンスの機能しない企業、オーナー独裁の企業、これといった資源・能力のない企業、危機的状況でも変わろうとしない企業、業界大手のおこぼれに預かる企業、反省なき経営、理念なき経営、現状維持をよしとする経営、ひたすら顧客に隷属する経営などなど。じつに凡夫（小善人・悪人を含め）が集まる凡庸な企業の方が世にはおおいのではないか。

経営学はこうした企業や個人の存在を拒絶までではないものの、やはり経営努力をうながすだけで、そのまま許容することはできないだろう。すくなくとも積極的に研究対象とすることはないだろう。

しかし、凡夫は競争社会の敗者や底辺の者たちだけではない。「みずから」や「自力」を奉ずる優れた人々や企業も、結局のところ、ビジネスにかかわっている時点で所有欲・支配欲にさいなまれる凡夫なのである。みな凡夫という人間像を前提にし、そうした個人や企業の受け皿となる経営学も必要だと思われる。

わたしは、そのような人間観に立ち、「やまと言葉」や「仏教思想」で構成される経営言語の複合体を「凡夫の経営」ないし「凡夫の経営学」と総称しておきたい。

VI おわりに代えて

ー経営学的フォークロアの探求ー

以上、言語ゲーム一元論、批判的実在論、言語

ゲーム一元論にもとづくTMSAの再解釈、「やまと言葉」、「仏教思想」と議論を進め、日本古来の文化的・風土的言語にもとづく経営学を展望してきた。

最後におわりに代えて、上記で提示した「凡夫の経営学」では、具体的にどのように研究をおこなうのか、その研究方法についてのべたい。

凡夫の経営学は、凡庸な企業が、あえなく倒産していくはかなさ、なんとなくその日暮らしてもやっているとのおかしさ、さらに理由も不明なまま時宜にめぐまれて成功するおもしろさなど、凡夫な個人の集まりが織りなす悲喜こもごもの経営を、ただあじわいみつめる。

その際、自力を超えて作用する「神仏に仮託されたおのずから」のはたらきを重視する。そして、その神仏に仮託された「おのずから」を研究する方法論としてもっとも適していると考えるのが、民俗学のフォークロア（民間伝承）の探求である。

日本の民俗学の体系化をこころみたのは柳田邦夫だが、民俗学をエスノロジーと考えるのか、フォークロアと考えるのか、学問として定着させるまでにはさまざまな変遷があったという。そして、むしろ「民俗学＝フォークロア論」を積極的に展開したのは折口信夫であり、彼は民俗学はエスノロジーではなく、民間伝承を研究対象とするフォークロアであるとのべたという。この流れを受け、今日ではフォークロアは国内の民間伝承を文化史的に再構成していく方向へ、そしてエスノロジーは海外の諸民族を研究する方向へと分化したという³²⁾。

わたしはこの「民間伝承＝フォークロア」に着目する。なぜなら、それが『遠野物語』のような「理屈では割り切れない世界」（富田，2012）をみせてくれると考えるからである。すなわち、神仏の加護や罰、あるいは因果応報（善因善果・悪因悪果）の観念などに仮託された「おのずから」の

32) 以上、この段落については宮田（2012）pp. 14-22を参照されたい。

存在を感じさせてくれるのではないかと期待する。

とくにわたしが探求したいのが、あるのかどうか定かではないが、経営（あきないやなりわい）に特化した民間伝承である。経営的民間伝承に、市井の人々（凡夫）のいとなみ（あきないやなりわい）と彼らが神仏（や因果応報観）に仮託した「おのずから」との「あわい」がそこに見いだせるのではないかと考える。

しかし、そのような研究は、老舗研究や商家（商人）の理念的研究とどこが違うのだろうか。残念ながら、こうした研究もまた、経営的含意をひきだして現代企業に応用しその再現をはかったり、あるいは商売上の道徳的規範をもちだし現代経営への教訓にしたりして、経営努力を「はかろう」とする。

わたしは、そうした成功手法の再現（理論化）や倫理的な啓蒙活動にはまったく興味が無い。繰り返すようだが、凡夫の経営（学）は「凡夫」と「おのずから」が織りあわさって、その刹那に成立した「あわい」や「縁」、その一過性を惜しみ楽しむものである。民間伝承から経営的含意をえたいわけではない。ただ「願わくはこれを語りて現代ビジネス・パーソンを慈しみたい」³³⁾のである。

【謝辞】

これまでの一連の研究とおなじく、本稿の数々の着想も、帝塚山大学准教授・水谷 寛氏とのサロンの議論からえられている。氏からは本稿全般

33) むろん、この文章は『遠野物語』初版序文の一節「願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ」（柳田，2004，p. 5）になぞらえている。

なお、ここで慈しむとは「抜苦与楽（ばっくよろく）」の「与楽」にあたる。中村（2015）によると、「慈悲」のうち「悲（あわれ）みのこころ」は、「抜苦与楽」の苦しみを除いてくれる「抜苦」の心にあたり、母親の愛にたとえられるという。対して、「慈しみの心」すなわち慈心は、楽しみをあたえる「与楽」の心と解され、父の愛にたとえられるという。つまり「慈しむ=与楽」とは、つねに楽事と安穩を求め、それをもって人々に益をあたえることなのである。以上、中村（2015）pp. 210-211 参照。

わたしは生き馬の目を抜く現代ビジネス社会に生きる人々に、できうるならこうしたフォークロアを通じて、ビジネスにおけるひとときの楽事と安穩を感じてもらいたい。

にわたって本当にさまざまな示唆をいただいた。

ここに重ねて氏に謝意を表す。ただしむろん、これまでと同様に本稿における誤謬・誤解はすべて筆者の責にある。

【参考文献】

- 阿満利磨（2011）『法然入門』筑摩書房。
- Bhaskar, R. (1975) *A Realist Theory of Science*, Routledge (式部 信訳 (2009)『科学と实在論—超越論的实在論と経験主義批判—』法政大学出版局。)
- Bhaskar, R. (1979) *The Possibility of Naturalism: A philosophical critique of the contemporary human sciences 3rd ed.*, Routledge (式部 信訳 (2006)『自然主義の可能性—現代社会科学批判—』晃洋書房。)
- Danermark, D., M. Ekström, L. Jakobsen and J. Ch. Karlsson (2002) *Explaining Society: Critical realism in the social sciences*, Routledge.
- 法然著 (1198)・阿満利磨訳・解説 (2013)『選択本願念仏集—法然の教え—第三版』角川ソフィア文庫。
- 井筒俊彦 (1992)『井筒俊彦著作集9 東洋哲学』中央公論社。
- 梶山雄一・上山春平 (1997)『仏教の思想3 空の論理<中観>』角川ソフィア文庫。
- 加藤 茂 (2002)『言葉と意味—仏教の言語論と現代記号学—』『東京造形大学研究報』No. 3, pp. 139-150.
- 黒崎 宏 (1997)『言語ゲーム—元論—後期ウィトゲンシュタインの帰結—』勁草書房。
- 黒崎 宏 (2009)『〈自己〉の哲学—ウィトゲンシュタイン—鈴木大拙・西田幾多郎』春秋社。
- 丸山圭三郎 (2012)『ソシュールを読む』講談社学術文庫。

- Lawson, T. (1997) *Economics and Reality*, Routledge (八木紀一郎監訳・江頭 進・葛城政明訳(2003)『経済学と実在』日本評論社.).
- Macy, J. (1991) *Mutual Causality in Buddhism and General Systems Theory: The Dharma of natural Systems*, State University of New York Press.
- 増谷文雄・梅原 猛 (1996)『仏教の思想1 知恵と慈悲くブッダ』角川ソフィア文庫.
- 宮田 登 (2012)『はじめての民俗学―怖さはどこからくるのか―』ちくま学芸文庫.
- 水谷 覚 (2015)「批判的実在論における会計の言語論的研究に向けて」『帝塚山大学経済・経営論集』第 25 巻, pp. 71-88.
- 水谷 覚 (2016)「会計の言語論的研究における二元論的対立関係とその弁証法的展開の可能性について」『帝塚山経済・経営論集』第 26 巻, pp. 21-34.
- 水谷 覚 (2017)「会計転態論による会計の方法論と実在論と」『関西実践経営』第 53 号, pp. 13-30.
- 中村 元 (2015)『ブッダ伝―生涯と思想―』角川ソフィア文庫.
- 野中郁次郎 (1990)『知識創造の経営―日本企業のエピステモロジー―』日本経済新聞社.
- 大橋俊雄 (1998)『法然』講談社学術文庫.
- 坂本雅則 (2007)『企業支配論の統一的パラダイム―「構造的支配」概念の提唱―』文眞堂.
- 佐々木正 (2014)『法然の思想 親鸞の実践』青土社.
- 末木文美土 (2013)『浄土思想論』春秋社.
- 竹内整一 (2011)『花びらは散る花は散らない―無常の日本思想―』角川学芸出版.
- 竹内整一 (2012)『やまと言葉で哲学する―「おのずから」と「みずから」のあわいで―』春秋社.
- 田村圓澄著・日本歴史学会編 (2008)『人物叢書 法然 新装版』吉川弘文館.
- 柳田国男 (2004)『新版 遠野物語』角川ソフィア文庫.
- 吉村泰志 (2017)「会社支配の主体」『帝塚山大学経済・経営論集』第 27 巻, pp. 13-22.